フランス世紀末文学叢書 II

# 黄金仮面の王

＝シュオブ短篇選集＝

マルセル・シュオブ

大濱甫 訳

国書刊行会

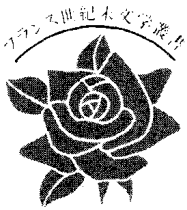
フランス世紀末文学叢書②
黄金仮面の王
定価　二八〇〇円
一九八四年八月二〇日　初版第一刷印刷
一九八四年八月二五日　初版第一刷発行
訳　者　大濱　甫
発行者　佐藤今朝夫
発行所　株式会社国書刊行会
東京都豊島区巣鴨三―五―一八
電話　〇三（九一七）八二八七　振替東京五―六五二〇九
印　刷　セイユウ写真印刷株式会社
製　本　大日本製本株式会社

Le Roi au Masque d'Or
Marcel Schwob

# 黄金仮面の王

＝シュオブ短篇選集＝

**マルセル・シュオブ**
大濱甫 訳




国書刊行会

口絵選定＝澁澤龍彦
装　幀＝山下昌也

# 目

# 次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

黄金仮面の王……九
黄金仮面の王……一一
地上の大火……二八
ミイラ造りの女……三三
ペスト……四〇
ミレトスの女たち……四七
モフレーヌの魔宴……五二
血まみれのブランシュ……五八
フルート……六四
眠った都……七〇
青い国……七六
クリュシェット……八二
バルジェット……八八
二重の心……九五
吸血鬼……九七
木　靴……一〇四
〇八一号列車……一一三

要　塞……一二〇
顔無し……一二七
アラクネ……一三四
顔を覆った男……一四一
ベアトリス……一四八
リリス……一五五
阿片の扉……一六三
交霊術……一七一
骸　骨……一七九
歯について……一八七
師……一九五
サビナの収穫……二〇一
メリゴ・マルシェス……二〇八
最後の夜……二一五
人形娘ファンション……二二四
ポデール……二三三
病　院……二三八
サン・ピエールの華……二四五

スナップ写真……二五二
未来のテロ……二五六
小児十字軍……二六三
遍歴僧の話……二六五
癩者の話……二六八
法王インノケンティウス三世の話……二七二
三人の少年の話……二七七
書記フランソワ・ロングジューの話……二八〇
回教托鉢僧の話……二八二
少女アリスの話……二八五
法王グレゴリウス九世の話……二八七
訳者後記……二九三

口絵　ダンテ・ガブリエル・ロセッティ《花飾りの女》

# 黄金仮面の王

黄金仮面の王

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

# 黄金仮面の王

アナトール・フランスに

黄金仮面を被った王は、何時間も坐っていた黒い王座から立ち上ると、騒ぎの理由を訊ねた。というのは、扉を護る衛兵たちが槍を組み合わせ、穂先の鳴る音が聞こえたからであった。青銅の火鉢を囲んで、右手に五十人の司祭、左手に五十人の道化が立ち並び、王の前では半円形に並んだ女たちが手を揺り動かしていた。火鉢の青銅の格子越しに光を放つばら色と真紅の炎は、すべての顔の仮面を輝かせていた。肉の顔を失った王にならい、女も道化も司祭も、銀や鉄や銅や木や布の動かない仮面を被っていたのだ。そして道化の仮面が朗らかな笑いをたたえているのに対して、司祭の仮面はもの思わしげに陰鬱だった。五十の陽気な顔が左手で輝き、右手では五十の悲しげな顔がしかめ面をしていた。一方、女たちの顔を覆う明るい布は、人工の微笑にはなやぐ永遠に優雅な顔を做っていた。だが、王の黄金の仮面は威厳があり、高貴で、まことに王者にふさわしかった。

ところで王はつねに沈黙しており、その沈黙によってこの王族の末裔たるにふさわしかった。こ

の都もかつては素顔の君主たちに支配されていたのだが、遙か以前から仮面をつけた王の系統が立ち現われていた。誰ひとりそれらの王の顔を見た者はなく、司祭たちさえこのわけを知らなかった。だが、古(いにし)えから、王宮に近づく者は顔を覆うようにという命令が発せられており、この王の一族は仮面をつけた人間しか知らなかった。

そして扉を護る衛兵たちの鉄具が顫え、武器が音を響かせている間に、王は重々しい声で彼らに訊ねた。

――わしが司祭と道化と女の間に坐しておる時刻にじゃまをするのは何者か！

すると衛兵たちは顫えながら答えた。

――いとも高貴なる黄金仮面の王さま、それは長い衣をまとった惨めな男でございまして、国じゅうをさまよう敬虔な乞食どもの一人と見受けられ、顔を曝け出しております。

――その乞食をここに通せ、と王は言った。

すると、司祭のうちで最も重々しい顔をした一人が王座のほうに向き、頭を下げると、

――ああ王さま、と言った。王さまの御一統にとりまして人間の顔を見るのはよからぬことと神託が予言しております。

そして、最も大きな笑いで口の裂けた仮面をつけた道化が王座に背を向けると、頭を下げて、

――ああ、まだ見たこともない乞食よ、と言った。お前を見ることが禁じられている以上、お前は黄金仮面の王以上に王者であるにちがいない。

そして、この上なく柔かな生毛の生えた做(つくり)ものの顔をした女が、両手をいったん合わせて離し、供犠の壺を摑むかのように曲げた。ところで王はその女のほうに眼を注ぎながら、見知らぬ顔の現われるのを恐れていた。

ついで、ある悪い欲望が王の心のなかに這いこんだ。

――その乞食をここに通せ、と黄金仮面の王は言った。

そこで、緑がかった金色や赤味がかった金色に輝きながら木の葉のように突き出た剣の鋼鉄の刃をまじえた槍の顫える森のなかを通って、白い顎鬚を逆立てた一人の老人が王座の下に進み寄り、おぼつかない眼の顫える素顔を王に向けて振り仰いだ。

――話してみよ、と王は言った。

乞食はしっかりした声で答えた。

――わしに言葉をかけたのが金の面をつけた方ならば、わしはそう思うのだが、たしかにご返事いたしましょう。その方の前であえて声を上げる者はおりますまい？　だがわしは自分の眼でたしかめることはできぬ――盲だから。それでも、肩を手でこする雅やかな音からこの部屋に女たちのいることがわかり、道化たちもいて、笑い声が聞こえ、重々しい囁き声からして、司祭たちもいる。ところでこの国の人々の話ではあなたらは仮面を被っており、王族の末裔である黄金仮面の王よ、あなたは生身の顔を見たことがない。お聞きなさい、あなたは王でありながら人民をお知りにならない。わしの左手にいるのは道化――というのは笑い声が聞こえるから。右手にいるのは司祭――

というのは泣き声が聞こえるから。そして女たちの顔の筋肉がゆがめられているのが感じとれる。

ところで、王が乞食が道化と呼んだ者たちのほうを向くと、その眼には司祭たちのもの思わしげに陰鬱な仮面が見え、乞食が司祭と呼んだ者たちのほうを向くと、その眼には道化たちの朗らかな笑いをたたえた仮面が見え、三日月形に並んで坐っている女たちのほうに視線を落すと、女たちの顔は美しく見えた。

――お前は嘘を言っておる、見知らぬ男よ、と王は言った。そして、お前は一つの顔で笑ったり泣いたりしかめ顔をしたりするやつだ。というのは、お前の醜い顔は固定することができず、偽るために変るようにできておるからだ。お前が道化と名指しした者たちはわしの司祭であり、司祭と名指した者たちはわしの道化である。そして、口をきくたびに顔に皺のよるお前ごときに、どうして女どもの変らぬ美しさが判断できようか？

――わしは女たちの美しさもあなたの美しさも判断できませぬ、と乞食は低い声で言った。というのもわしは盲で、なにも知らぬゆえ。そしてあなたも他人についてもあなたご自身についてもなにもお知りにならぬ。だがわしは、自分がなにも知らぬことを知っている点で、あなたより優れておる。それにわしは推測することができる。ところで、あなたに道化と見える者たちはおそらく仮面の下で泣いており、司祭と見える者たちがほんとうの顔はあなたをだます悦びでゆがめているかもしれず、また女どもの顔が絹の下で灰色をしているのをあなたはご存知ない。そして、黄金仮面の王よ、あなたご自身、顔の飾りに反して見るも怖ろしい顔をしていないと誰が知りましょう？

すると、陽気にいちばん大きく口を開けている道化がすすり泣きにも似た嘲り声を上げ、いちばん暗い顔の司祭が神経的な笑い声にも似た哀願の言葉を発し、女たちの仮面がすべて顫えた。

そして、金の面をつけた王はある合図をした。と、衛兵たちが素顔の老人の肩を摑み、部屋の大きな戸口から外に突き出した。

その夜は過ぎたが、王は睡眠中も落着かなかった。そして朝になると宮殿内をさまよった、ある悪い欲望が心のなかに這いこんでしまっていたからである。だが寝室にも、石畳を敷きつめた高い宴会の間にも、彩られ金箔を張った祝祭の間にも求めるものは見出せなかった。王宮中に鏡は一つもなかった。長い年月にわたって、神託の命令と司祭の法令によってそう取り決められてきたのだ。

王は黒い王座の上から道化たちに興じることも、司祭たちに耳を傾けることも、女たちを眺めることもなかった。自分の顔のことを考えていたからである。

夕陽が王宮の窓に血にまみれた金属のような光を投げたとき、王は火鉢の広間を出ると、衛兵たちを遠ざけ、七重の輝く城壁でとざされた同心円を形造る七つの内庭を足ばやに横切り、低い裏門からこっそり野原に抜け出した。

身を顫わせ、好奇心を働かせていた。自分が他人の顔に、またおそらくは自分の顔に出会いに行くのだと知っていた。心の底で自分自身の美しさを確めたいと願っていた。なぜあの惨めな乞食は王の胸のなかに疑念をすべりこませたのだろう？



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com